

[特集2] 学芸員課程パネル展示 2013.12.5~12



導入パネルとコーナー1「岡山の博物館を訪ねて」



岡山大学Facebookでも本展示が紹介



コーナー2「考・博物館」

フォーラムと連動し、博物館展示論の授業の一環で行ったパネル展示「岡大生が考える地域と博物館」は、2013年度学芸員課程科目の諸活動に基づきます。「岡山の博物館を訪ねて」コーナーでは、2013年度前半に博物館実習で見学した岡山市内の3つの館（岡山県立博物館、岡山市立オリेंट美術館、林原美術館）を取り上げました。実習生が感じた館の魅力をもとに、博物館展示論履修生が実際に現地に赴きつつパネル化しました。「考・博物館」コーナーは、博物館経営論の授業で作成した架空の博物館構想に基づきます。

あくまで小規模で、会場とした部屋もギャラリー的使用自体が初めての状況でしたが、実際に展示をつくってみてはじめて気づく点が多かったのは事後の授業におけるレポートやディスカッションでも明らかでした。今後はより多くの方々が集う環境での開催も検討しつつ、実践的学習を重ねていきたいと思います。

NEWS & TOPICS 2013年度に実施した活動

■学芸員課程ランチタイム企画「トーク・ミュージアム」

会場 岡山大学文学部学芸員課程ミュージアム教育実習室
(文・法・経済学部1号館3階301号室)

第1回 2013年7月31日(水)

トークテーマ 「ワシントンD.C.とニューヨークのミュージアム」
光本 順 大学院社会文化科学研究科・文学部(学芸員課程担当)

第2回 2014年2月6日(木)

トークテーマ 『布』を美術館に展示するということ
～南オーストラリア美術館における企画展「Beneath the winds : Masterpieces of Southeast Asian Art from the Art Gallery of South Australia」を素材に～
中谷文美 大学院社会文化科学研究科・文学部(文化人類学)

■博物館展示の実際をボランティアスタッフとして体験

本課程の文学部2年生2名が岡山シティミュージアムにおける特別展準備作業に参加。パネル設置や展示品を並べる作業などを行う。2014年2月7日～23日の「鹿田キャンパス発掘30年記念特別展示 弥生時代を語る」展(主催 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター・岡山シティミュージアム)。



トーク・ミュージアムにて東南アジアの布を手文化人類学的視点から展示を語る中谷先生。

■文学部学芸員課程ホームページ開設

2014年3月より
URL <http://www.okayama-u.ac.jp/user/pmw>

■地域資源をいかした学芸員養成教育の実践

2014年3月に文学部学芸員課程と考古学研究室との合同による岡山市津倉古墳の測量調査を開始。岡山大学津島キャンパス近隣の京山に所在する古墳時代の方後方墳。

02

March 2014

学芸員課程 Newsletter

Newsletter from Course
for Prospective Museum
Workers, Faculty of Letters,
Okayama University

編集：光本 順
発行：岡山大学文学部学芸員課程
〒700-8530 岡山市北区津島中3-1-1
発行日：2014年3月7日

contents

開催 学芸員課程フォーラム&パネル展示 光本 順	1
特集1 学芸員課程フォーラム「地域の博物館と大学」 講演1 矢島 國雄	2
講演2 田村 啓介	2・3
報告 光本 順	3
学生による展示解説プレゼンテーション ..	3
特集2 学芸員課程パネル展示	4
NEWS & TOPICS	4

開催 学芸員課程フォーラム&パネル展示

2013（平成25）年12月11日に、博物館と大学の連携について世界と地域の視点から考える学芸員課程フォーラム「地域の博物館と大学」を文・法・経済学部講義棟で開催しました。また同時開催企画として12月5～11日に、学芸員課程パネル展示「岡大生が考える地域と博物館」を文・法・経済学部1号館リフレッシュルームにて実施しました。文学部学芸員課程が主催するこうした催しは、いずれも今回が初の試みです。新学芸員課程のスタート機に、平成25年度岡山大学「機能強化戦略経費」採択プロジェクト「地域密着型による実践的学芸員養成教育プログラムの構築」のコア事業として実施したものです。本号ではフォーラムにおける講演・報告要旨と学生によるプレゼンテーションのもよう、ならびにパネル展示についてお伝えします。

フォーラムには学芸員課程で学ぶ文・理・教育学部の学生や教職員、岡山県内の大学・博物館関係者ら88人が参加しました。久野修義文学部長による挨拶の後、全日本博物館学会長である明治大学の矢島國雄教授が、世界

的視野から日本の学芸員養成の特徴とその課題について講演。一方、岡山県立博物館の田村啓介館長は、地域の博物館の立場から同館の教育普及活動を紹介しつつ、本学との今後の連携について具体的に提案しました。本学における取り組みに関する報告と、学生による展示解説プレゼンテーションの後、新納泉文学部学芸員課程専門委員長を司会に全体ディスカッションを実施。地域の博物館と大学が手を携えながら、地域資源をはぐくみつつ実践的に学ぶ学芸員養成の仕組みづくりについて、学生もまじえ活発に意見が交わされました。

パネル展示「岡大生が考える地域と博物館」は博物館展示論履修生が担当した小企画展です。地域の博物館の魅力伝える「岡山の博物館を訪ねて」コーナーと、博物館経営論の授業で作成した博物館の経営構想パネル「考・博物館」コーナーからなります。学生は広報用チラシやパネル作成、展示レイアウトなど授業で学んだことを駆使しつつ、地域に博物館のおもしろさや学生ならではの自由な発想を披露しました。



久野修義文学部長によるフォーラム開催挨拶



学生が作成した学芸員課程フォーラムと展示の案内チラシ

講演



●**日本の学芸員養成の特質** 日本の学芸員制度は「博物館法」と「博物館法施行規則」によって規定されています。1955年に博物館法施行規則に従って大学での学芸員養成がスタートしました。1950～60年代という時代は大学進学者も限られており、博物館側も大学院修了者を求めるどころまでには至っていませんでした。1970年になると博物館の数は約1000館まで増えます。1973年には「公立博物館の設置および運営に関する基準」(48基準)が制定され、地方公共団体が設置する博物館のレベル向上に貢献しました。大学の大量化と学問の国際化が進む1970年頃から、美術系や自然科学系を中心とする博物館では学芸員採用にあたって修士修了以上の高い学術的専門性を要求する傾向が進みました。欧米の博物館先進国と言われる国の状況は、70年代頃から博物館専門職の専門性が分化し、チームで博物館を動かす仕組みが強まります。キュレーター(curator, keeper)に加えてコンサーベーター(コンサーバター)(conservator)やエデュケーター(educator, curator of education)、レジストラー(registrar)等の職種が生まれ、博物館職員数もこの時期から増えます。ところが日本では資格取得者は増えたのに現場の採用は増えず、学芸員の専門性の確立も研究職としての処遇も不十分なのが現状です。

日本の大学での学芸員養成に対しては、訓練度の低下が博物館側から問題とされ、1997年に法定科目単位数が少し増えました。2008年には博物館法改正を機に大幅な見直しながざれ今日に至ります。しかしながら学芸員養成はその基礎を学部置くジェネラルな養成が基本であり、諸

講演要旨1

「世界の博物館を訪ねて

—日本と世界の博物館専門職員—

矢島 國雄氏(明治大学教授・全日本博物館学会会長)

外国のような実際の博物館の各種の専門的業務に分化しての養成ではありません。

●**日本の学芸員制度の問題点** 博物館側が資料にかかわる専門的研究能力を採用で求める傾向は強まっています。一方で研究だけでなく博物館に関する基本的資質も養う必要があります。また現行の制度では資料の取り扱いに関する訓練不足も否めません。今回の法改正で博物館資料保存論や博物館展示論などの科目がプラスされた点は前進といえます。しかしながら現状の大学での学芸員養成は入門程度の教育訓練です。加えて学部における専門教育と学芸員養成がリンクしないケースが多いことも問題です。このように現状の学芸員養成制度の問題は、どのような専門職員を養成するかという明確なビジョンを描きにくい点にあります。その上で、実践的訓練の強化は大きな課題といえます。

●**世界の博物館専門職員と大学** 欧米では国家資格としての学芸員資格は一般にはありません。専門職員養成の仕組みは国によって多少異なりますが、博物館協会などが大学とともに博物館専門職員の養成に関与し、養成と採用のシステムが機能しています。アメリカの博物館専門職員の養成は、分化した博物館専門職においておよそ8週間以上のインターンシップ形式で行われます。それは現場の職員と一緒に実際の仕事をこなすものであり、日本における博物館体験としての実習とは質が異なります。

世界では同種の博物館におけるネットワークの緻密化と、異種の博物館による地域ネットワークの強化という動きがあります。後者の例で、保存科学や修復技術に関するコンサーベーターは、世界の博物館でも配置が少ないのですが、国内や地域の博物館に技術情報を提供するネットワーク作りが進みつつあります。

アメリカ、ドイツ、イギリスなどでは、博物館と大学との共同調査・研究の例がたくさんあります。例えばイギリスのレスター大学には世界的に有名な博物館学研究室があります。ここでは専門職の養成を行うだけでなく、博物館の社会連携に関する研究センターもあり、イギリス各地の博物館と教育活動を行っています。日本の場合、博物館と大学の連携は博物館実習以外では非常に少なく、課題の一つだと思います。大学と博物館は教育と研究を通し、地域に貢献していくべき存在であるという点で共通しています。大学の集積した学術資源、研究資源、研究成果を発信する場として、大学が博物館をつくることにも積極的に取り組むべきです。

講演要旨2 「岡山県立博物館の教育普及活動と大学連携」

田村 啓介氏(岡山県立博物館長)

●**岡山県立博物館の概要と現状** 岡山県立博物館は昭和46年、県政百年の記念事業の一環として後楽園の外苑に設立された歴史博物館です。岡山にかかわる考古・歴史資料、備前焼や刀剣に代表される美術工芸資料等の約2万件を所蔵しています。「岡山県の歴史と文化」をテーマに、常設展示に加え特別展・企画展および他館との交流展を年数回開催し、年間4～5万人の来場者を迎えています。また、国宝・重要文化財の展示が比較的容易にできる「公開承認施設」として国から認定された施設です(県内ではほかに2館)。現在の課題として、開館から42年が経過し施設の老朽化が進んでいること、学芸員業務の増加により調査研究活動と教育普及活動との持続的な両立が厳しくなっていることなどが挙げられます。

●**岡山県立博物館での教育普及活動** 学習指導要領の改訂に伴い、学校の教育活動の中での博物館利用が進んでいます。県立博物館でも学校教育との連携という視点から、小中高生を対象にした様々な事業に取り組んでいます。



「地域の博物館と大学」

館内授業や出前授業に加え、博物館での学びを深める「吉備の国ジュニア歴史スクール」（子どもが文化財の現地を訪ね実際に調査研究を体験し、調べたことを発表する試み）や、学芸員を目指す中高生に向けた「ジュニア学芸員講座」などの取り組みがあります。一般向けの普及活動としては博物館友の会の活動があります。年会費が必要ですが、会員は展覧会が無料で鑑賞できるだけでなく、他博物館などの現地見学会や県内の史跡等を訪ねる「ふるさと散策」など、博物館の外での活動へも参加できます。また博物館のイベント補助や鑑賞者のボランティアガイドとしても活躍できます。友の会は会員自身の自己教育・生涯学習の場として機能するとともに、館にとっては貴重な支援組織でもあります。現在、会員はシニアが主になっていますが、ぜひ若い世代にも参画してほしいと願っています。

●岡山県立博物館と岡山大学の連携案 岡山大学との連携については、学

芸員課程の見学実習の受け入れだけを行っているのが現状です。今後検討すべき活動案としては、①博物館と学芸員課程との連携に向けた取り組み、②博物館の展覧会活動における連携への取り組み、③博物館の教育普及活動への大学の参画、④「岡山カルチャーゾーン」における連携に向けた取り組みが挙げられます。具体例としては、①博物館実習の強化に伴う実習生の受け入れや大学への学芸員の派遣、②岡山大学埋蔵文化財調査研究センターとの展示協力や「池田家文庫」の共同調査・研究、大学との共同企画による展覧会開催、③博物館友の会への学生加入や学芸員業務の実体験、④文化施設を核とした地域づくりへの参画や岡山大学地域総合研究センターとの連携、住民参加型の地域活性化事業への参画、などが考えられます。博物館の現状を踏まえたうえで、博学連携の道を探っていききたいと思います。

報告要旨 「岡山大学における学芸員課程のニュー・ビジョン」

光本 順 氏（岡山大学准教授）

報告

●新学芸員課程における取り組み 2013年度からはじまった岡山大学文学部の新学芸員課程ではいくつかの新たな取り組みを行っています。一つは学芸員課程ミュージアム教育実習室という学びの拠点が出来ました。ここでは実際に、授業の課題作成や普段の学習、あるいはイベント会場に使用しており、カリキュラムとそれを越えたプラスアルファの学びの場となっています。2番目はニュースレターの発行です。特集記事や岡大卒の先輩学芸員の方へのインタビューなどで構成され、教育や広報のための媒体です。3番目はランチタイム企画「トーク・ミュージアム」をはじめました。これはミュージアム教育実習室で行う博物館に関わる気軽な話題提供の場です。大学教員も学生もさまざまな形で博物館と関わっています。いろいろな経験を共有するために、回を重ねていけたらと思っています。4番目は初めて学芸員課程でパネル展示を開催しました。新科目の博物館展示論における学習の一環です。5番目は本日のフォーラムの開催です。6番目は今年度中に文学部学芸員課程ホームページを作ります。

●新たなカリキュラム 文学部における新学芸員課程カリキュラムの大きな変更点として、実践的教育の強化があります。2014年度の人文系博物館実習からは、特に地域の博物館の多大なご協力によりインターンシップ的な取り組みを行います。新課程を機会に地域にいっそう踏み出すということです。また展示実践も学内での実習に組み込みます。こうした実践的な実践的教育を充実させる上でも、大学博物館の設立がのぞまれます。

●地域の博物館と岡山大学 大学から見た地域の博物館との連携の在り方について座標軸、すなわち教員主体か学生主体か、また個別の専門領域主体か学芸員課程が主体かで分けてみましょう。従来は大学教員が博



物館で講演するといった教員・専門領域主体パターンの連携がもっともスタンダードでした。学生主体という点では、例えば考古学を専門とする学生は近隣の津島遺跡にある「遺跡&スポーツミュージアム」でアルバイトをしながら、専門分野だけでなく博物館についても日常的に学んでいます。これから目指すべき大学と地域の博物館との連携としては、学生・学芸員課程主体のパターンです。実習における地域との関わり強化だけでなくプラスアルファの部分、例えば友の会やボランティアといった形ですが、それをいかに開拓できるかが重要と思います。

次世代学芸員を育成するためには、地域の博物館と大学の連携は不可欠です。その際に、地域資源のポテンシャルを博物館と大学教育の双方から高められるような活動をぜひ行いたいと考えます。この点で博物館概論の授業の中で学生に尋ねたところ、例えば展示やイベントの手伝いとか、大学生あるいは若者向けのワークショップ企画とかいろいろな連携のアイデアが寄せられました。今回のパネル展示では単に地域の博物館から学ぶだけでなく、自分たちが博物館の魅力をしっかり発信する主体になる試みでもあります。

学生による展示解説プレゼンテーション



フォーラムでは講演・報告の後に学生主体プログラムとしてプレゼンテーションを実施。ここでは同時開催企画であるパネル展示の解説を学生が行いました。作成にあたり工夫した点や見どころなどをアピール。会場からは展示をみた感想や展示作成のためのアドバイスもいただきました。